

## 第4節 植栽

### 別邸庭園における植栽の特徴

**全体的な特徴** 本庭園にみられる樹木は、現在1,067本（モウソウチクを除く）70種が確認される。常緑樹と落葉樹の比率では常緑樹787本（73.8%）、落葉樹280本（26.2%）と全体的には常緑樹主体の庭園であり、新潟県内における代表的な23の史的庭園の常落傾向、常緑樹75.4%、落葉樹24.6%と類似している。花木（高木）はツバキ類、ツツジ類以外に目立ったものではなく全体としては常緑樹本位で、華やかではないものの、年間を通して観賞する多くの日本庭園の特徴と重なる。なお、本庭園の現存樹木には実生木も数多く含まれており、かつ、後植された樹木もあることから、築庭当時の姿そのままではないことを考慮する必要がある。常緑樹ではクロマツが多く、江戸時代後半に植樹された防砂樹をそのまま残し庭園に取り込んで利用したものであり、その数も多く現在は高さ16m、幹周2mを越える巨木となっている。

新潟県内の庭園の地域的特性として、沿岸地域ではクロマツ、スダジイなどの高木とツバキなどの低木類が多く、平地地域ではアカマツ、アカガシなどに加えてモミジ類が多用され、山地地域ではスギ、ゴヨウマツを背景として、モミジ類主体の庭園となり、低木にツツジ類の刈込みが出現する傾向がある。本庭園内におけるクロマツの存在は、海岸線から15km以内の沿岸地域にみられる地域的特性のひとつといえる。

一方、落葉樹では280本のうち、167本（60%）がモミジ類であり、そのほとんどが主庭中央部に植栽され「モミジ谷」を形成しており紅葉の庭を強く印象付ける。平成20年（2008）11月30日の一般公開では2,267人の市民が訪れ、鮮やかに色づく紅葉を堪能し、特に紅葉の美しい庭園として市民の期待も大きい。

**個別的な特徴** 玄関庭は、イロハモミジ（落葉樹）1本以外は全て常緑樹である。主景木は2本のクロマツであり、そのうち大ぶりの1本は正門正面に「門冠り松」として植栽されている。クロマツ以外はすべてモッコクで建物際に植えられ、背景樹として建物と調和しモノトーンで落ち着いた雰囲気を出している。幅広の御影石の通路（アプローチ）脇には低木類が少なく、雪置き場として除雪に対応した工夫もみられる。

中庭は、常緑樹75本（79%）落葉樹20本（21%）で常落混交の庭園である。常緑樹のうち、モッコク27本、クロマツ11本で優占している。モッコク、クロマツ

はその多くが南側に続く塀際に並ぶように植えられており、塀からはみ出した樹木が沿道景観にクラシカルな落ち着きを与えている。

庭園なかほどにあるカリンは、実を多く付けることから子宝に恵まれ子孫繁栄を念じ、さらに庭園の西南隅（裏鬼門）に植えられたザクロは、災いを遠避けて吉を呼び込む家相上の意味などがあると推察される。

主庭は、座観式でありながら、かつ自然（砂丘地形）をうまく利用してさまざまな「境」をつくり、中央に池を穿ち、園路をしつらえた池泉回遊式庭園でもある。

### 感性表現と庭園の形

さて、植栽を論じるときに重要な側面として「感性」がある。たとえば自然という対象をどう認識するかで表す感覚表現で、庭園の場合、様式や形式として表出されることも多い。本庭園では作者の感性として、構成観、自然観、造形観が主庭各所に投影されている。**構成観** 主屋の第1次接点として接する池泉手前の主庭空間の植栽様態で、洒脱で格式ある建築物に付随する縁先蹲踞、灯籠などとともにモッコクやタブノキ、イチイやクロマツなどで構成された植栽である。

ここでは近景に主眼が置かれ、下枝のない樹々を額縁のようにあつかうフレーム効果も考慮されており、主に1階広間で座して観賞するフォーマルな庭園である。

**自然観** 大滝や流れを中心とした自然味溢れる植栽様態である。ここでは深山幽谷の世界がモミジ類を多用して表現されている。一般に陰樹と陽樹の関係、常緑樹を背景に手前に強制的に使用される落葉樹との関係、主木と低木、地被類との関係など単一樹種だけでは処理できないケースも少なくないがここでは最上層部にスダジイなどの常緑樹、その下層にはオオモミジ、イロハモミジなどを植え、樹種を極力単一化して統一感を強調し、より自然であることに腐心している。

**造形観** 茶庭にみる根上がり松は、この地の自然風土と作庭者の自然観が交流し、結果的に表出された造形である。そこには人間の意志と自然に対する深い造形意欲が感じられ、作庭者が内包する自然観の極端な現れの象徴としてみるができる。

### 主要参考文献

- ・土沼隆雄『史的庭園形成における地域性に関する研究』新潟大学学位論文、1995年。
- ・進士五十八『日本庭園の特質』東京農業大学出版会、1987年。

表3-1 旧齋藤家別邸庭園の樹木リスト

常落区分	樹種名	学名	常落区分	樹種名	学名
常緑樹	アカガシ	<i>Quercus acuta</i>	常緑樹	アオキ	<i>Aucuba japonica</i>
常緑樹	アカマツ	<i>Pinus densiflora</i>	落葉樹	アベリア	<i>Abelia x grandiflora</i>
落葉樹	アカメガシワ	<i>Mallotus japonicus</i>	落葉樹	ウツギ	<i>Deutzia crenata</i>
常緑樹	アキグミ	<i>Elaeagnus umbellata</i>	常緑樹	カクレミノ	<i>Gilbertia trifida</i>
常緑樹	アラカシ	<i>Quercus glauca</i>	落葉樹	キズタ	<i>Hedera rhombea</i>
常緑樹	イスノキ	<i>Distylium racemosum</i>	常緑樹	クチナン	<i>Gardenia jasminoides</i>
常緑樹	イチイ	<i>Taxus cuspidata</i>	落葉樹	サカキ	<i>Cleyera ochracea</i>
落葉樹	イロハモミジ	<i>Acer palmatum</i>	落葉樹	サンショウ	<i>Xanthoxylum piperitum</i>
落葉樹	ウメ	<i>Prunus Mume</i>	常緑樹	シキミ	<i>Illicium religiosum</i>
落葉樹	ウリハダカエデ	<i>Acer rufinerve</i>	常緑樹	シャリンバイ	<i>Rhaphiolepis umbellata</i>
落葉樹	エノキ	<i>Celtis sinensis</i>	常緑樹	ツツジ類	<i>Rhododendron</i>
落葉樹	オオシマザクラ	<i>Prunus donarium</i>	落葉樹	ドウダンツツジ	<i>Enkianthus perulatus</i>
落葉樹	オオモミジ	<i>Acer amoenum</i>	常緑樹	トベラ	<i>Pittosporum Tobira</i>
落葉樹	カキ	<i>Diospyros Kaki</i>	落葉樹	ナンテン	<i>Nandina domestica</i>
常緑樹	カヤ	<i>Torreya nucifera</i>	落葉樹	ニシキギ	<i>Euonymus alata</i>
落葉樹	カリン	<i>Pseudocarya sinensis</i>	落葉樹	ハギ	<i>Lespedeza thunbergii</i>
常緑樹	キョウチクトウ	<i>Nerium indicum</i>	常緑樹	ヒサカキ	<i>Eurya japonica</i>
常緑樹	キンモクセイ	<i>Osmanthus fragrans</i>	常緑樹	ピナンカズラ	<i>Kadsura japonica(L.)Dunal</i>
常緑樹	ギンモクセイ	<i>Osmanthus fragrans Lour.var.</i>	常緑樹	ピラカンサ	<i>Pyracantha</i>
常緑樹	クロマツ	<i>Pinus Thunbergii</i>	常緑樹	マサキ	<i>Euonymus japonica</i>
常緑樹	ゲッケイジュ	<i>Laurus nobilis</i>	落葉樹	マユミ	<i>Euonymus Sieboldiana</i>
落葉樹	ケヤキ	<i>Zelkova serrata</i>	常緑樹	ヤツデ	<i>Fatsia japonica</i>
落葉樹	ザクロ	<i>Punica Granatum</i>	落葉樹	ヤマグワ	<i>Morus australis</i>
常緑樹	サザンカ	<i>Camellia Sasanqua</i>	常緑樹	ユキツバキ	<i>Camellia japonica subsp.</i>
落葉樹	サルスベリ	<i>Lagerstroemia indica</i>	落葉樹	ユキヤナギ	<i>Spiraea Thunbergii</i>
常緑樹	サンゴジュ	<i>Viburnum Awabuki</i>			
落葉樹	シダレザクラ	<i>Cerasus spachiana f.</i>			
常緑樹	シュロ	<i>Trachycarpus excelsa</i>			
常緑樹	シロダモ	<i>Litsea glauca</i>			
常緑樹	スダジイ	<i>Castanopsis sieboldii</i>			
落葉樹	ソメイヨシノ	<i>Prunus x yedoensis</i>			
常緑樹	タブノキ	<i>Machilus Thunbergii</i>			
常緑樹	タラヨウ	<i>Ilex latifolia</i>			
常緑樹	ネズミモチ	<i>Ligustrum japonicum</i>			
常緑樹	ヒイラギ	<i>Osmanthus ilicifolius</i>			
常緑樹	ヒマラヤスギ	<i>Cedrus Deodara</i>			
常緑樹	マテバシイ	<i>Lithocarpus edulis</i>			
落葉樹	ムクゲ	<i>Hibiscus syriacus</i>			
常緑樹	モチノキ	<i>Ilex integra</i>			
常緑樹	モッコク	<i>Ternstroemia japonica</i>			
常緑樹	ヤブツバキ	<i>Camellia japonica</i>			
常緑樹	ヤブニツケイ	<i>Cinnamomum japonicum</i>			
常緑樹	ユズリハ	<i>Daphniphyllum macropodum</i>			
常緑樹	ラカンマキ	<i>Podocarpus chinensis</i>			
常緑樹	モウソウチク	<i>Phyllostachys pubescens</i>			

特記:	
アカガシ	実生木:常緑広葉樹林(内陸側)
アカメガシワ	実生木:常緑広葉樹林(海岸側)
アキグミ	実生木:常緑広葉樹林(海岸側)
ウリハダカエデ	実生木:常緑広葉樹林(山岳側)
エノキ	実生木:常緑広葉樹林(内陸側)
クロマツ	防砂林として植栽
ケヤキ	実生木:常緑広葉樹林(内陸側)
シュロ	実生木
シロダモ	実生木:常緑広葉樹林(海岸側)
タブノキ	実生木:常緑広葉樹林(海岸側)
ヤブニツケイ	実生木:常緑広葉樹林(海岸側)
ウツギ	実生木:常緑広葉樹林(海岸側)
カクレミノ	実生木:常緑広葉樹林(海岸側)
キズタ	実生木
サカキ	常緑広葉樹林(海岸側)
シャリンバイ	常緑広葉樹林(海岸側)
トベラ	実生木:常緑広葉樹林(海岸側)
ヤマグワ	実生木:常緑広葉樹林(内陸側)

## 第5節 石造物

**石造物の種類と特徴** 旧齋藤家別邸庭園には、多くの石造物が存在する。その内訳は、灯籠21基、層塔2基、手水鉢7基、欄干柱2基で、そのリストおよび分布を表3-2、図3-20に示し、報告書の巻末図版にすべての写真を掲載した。

**灯籠** 石灯籠の本格的な庭園への導入は桃山時代、露地空間の成立とともに始まる。江戸期以降は、照明用のみならず、庭の添景物として必要不可欠なものとなり、さまざまな意匠のものが作成された<sup>1)</sup>。特に近代以降は、石工技術の進歩もあり、石灯籠の巨大化が進んだ。本庭園内にも大小さまざまな種類のものが存在する。富澤信明氏所蔵の『大正九年西大畑別荘建物及庭園築造関係綴』（以下、富澤史料）には、石造物等の庭園材料の発注記録が残されている。そこに記されている山寺雪見形（灯-18）と般若寺形（灯-19）は、大正6年～同9年（1917～1920）の齋藤家による庭園造営時に購入されたものと断定でき、また灯-18は地元の石工・倉田六治の作であるとの記録が残っている。他の各灯籠の制作者を特定することはできないが、灯-1、6、7、17、19に、「笠の軒が薄く、竿の節が突出する」という共通点があることから、倉田以外の同一人物の制作、もしくはこれらの灯籠制作にも倉田が関与していた可能性が考えられる。また、玄関脇にある銅製灯籠（灯-2）は、竿に刻まれた銘から、昭和9年（1934）の秋に地藏堂（現・燕市）の御釜師、10代堀政五郎が制作したものであることが分かる。

なお、昭和39年（1964）に発生した新潟地震（M7.5）等により、多くの灯籠（灯-3、8、11、15、21）が破損や倒壊などの被害を受けており、保存修復等の措置を講ずる必要がある。

**層塔** 層塔が庭園内における添景物として用いられるようになるのは、江戸時代以降である<sup>1)</sup>。本庭園内には2基の層塔が存在し、両塔とも十三重の笠をもち雄大である。そのうち、層塔-1は塔身に火袋を掘り、灯籠としての機能もあわせ持っている。富澤史料によると層塔-1が、当時2,000円で購入されており、庭園材料のなかでもっとも高価なものである。なお、層塔-1、2ともに昭和39年（1964）の新潟地震によって相輪が落下してしまっているため、修復する必要がある。なお層塔-1の相輪は、田舎屋背面の土留めの一部として使用され、土中に半分埋没しているため、修復に際しては石積みを手を加える必要がある。

**手水鉢** 手水鉢には、露地の蹲踞の中心をなす蹲踞手水鉢（手水-1、2、6、7）と建物の縁先に置かれる縁先手水鉢（手水-3、4、5）のふたつのタイプが存在する<sup>1)</sup>。蹲踞手水鉢、縁先手水鉢ともに、庭園全体としての統一性はなく、存在する空間にあわせ、形や大きさを変えている。そのなかでも、本庭園を代表する手水鉢として主屋の広間前面に設けられた縁先手水鉢（手水-3）が挙げられる。この縁先手水鉢の大きな特徴は、水汲石、清浄石に地元産の佐渡赤玉石を使用していること、そして近代的な水道システムを利用している点にある。水道システムにより溢れだした水が、下に据えられた赤玉石に落ち、流れに変わり、池に落ちるといった美しい構成は、地域性、時代性を現しており、他に類をみない。

**欄干柱** 流れに架かる石橋の脇に欄干柱を1基設けるという特徴的造園手法が本庭園では用いられている。欄干柱を庭園内に利用する手法は、近代数寄者として有名な益田克徳（1852～1903）の根岸邸でもみられる<sup>2)</sup>。克徳は、渋沢栄一の「暖依村荘」を始めとする築庭活動を2代松本幾次郎とともにこなっており<sup>3)</sup>、欄干柱を庭園内に利用する手法は、2代幾次郎、亀吉と受け継がれた特徴的な手法であると推測できる。なお、主庭東の石橋脇に設けられた欄干柱は、東京市本所区（現・墨田区）にあった浩養園の売立で松本亀吉が入手したもので、価格は450円であった。

### 補注および引用文献

- 1) 小野健吉『日本庭園辞典』岩波書店、2004年。
- 2) 近藤正一『名園五十種』博文館、1910年。
- 3) 正田実知彦「旧渋沢庭園と三人の作庭者」『あらかわ学会年次大会2010講演論文集』2011年。
- 4) 塚本嘉一『石塔と石灯籠』鎌倉新書、1980年。
- 5) 上原敬二『石灯籠・層塔』加島書店、1981年。



図3-19 益田克徳氏舊邸の庭（出典：近藤正一『名園五十種』<sup>2)</sup>）

表3-2 石造物の形状および所見（塚本嘉一『石塔と石灯籠』<sup>4)</sup>、上原敬二『石灯籠・石塔』<sup>5)</sup>を参考にした）

No.	灯-1	灯-2	灯-3	灯-4
寸法(mm)	H=2100,W=900	H=2250,W=600	H=1350,W=540	H=2100,W=540
形式	八角形	丸形銅製灯籠	丸形生込み	利久形(遠州形)
材質	花崗岩	銅,花崗岩(基壇のみ)	花崗岩	花崗岩
所見	元は、宝珠の先端が長く伸びていたようだが、欠けてしまっている。また、蓮花もない。笠の軒が薄い。火袋は虎、獅子、牡丹、竹の彫刻で飾られており、中台は「出」を反転させた彫刻が施されている。彫刻も多く、返花のそりが大きく鋭い、華やかな灯籠である。	宝珠が炎のような意匠になっており、笠にはドラゴンが舌を出している姿を表現した職手がついている。中台の格座間には「五三桐」と「丸に片喰」の紋が、基壇には走り獅子紋が刻まれている。竿には「昭和九年戊戌造之北越地蔵堂住人御堂師範政五郎浄観」と刻銘されている。	笠の球形の彫刻を始め、火袋、中台、竿ともに円形で丸みを帯びている。竿部の風食が激しいため、エポキシ系樹脂等による修復および補強が必要である。蹄踏灯籠として用いられており、バランスがよい。	書籍によっては遠州形とも称される。利休形の通常のものより、宝珠の先端が天に向かって長く伸び、また竿部の蓋が厚いため、バランスが悪い印象を受ける。なお、一度落下したのだろうか、宝珠の先端が欠けている。
No.	灯-5	灯-6	灯-7	灯-8
寸法(mm)	H=2700,W=960	H=2250,W=720	H=1800,W=540	H=1650,W=960
形式	富士形	六角形	春日形	四角形(富士形に似る)
材質	花崗岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩
所見	本来、神前や仏前用の灯籠である。ただし、表面が水磨き仕上げでなく、ミ切り仕上げ(ミドリ仕上げ)となっており、庭園で使用するための工夫がなされている。しかし、あまりに直線的・人工的な石燈籠であるため、違和感を覚える。	笠は波形であるが、照りが強く起りが弱い。軒が薄く30mmしかなく、火袋に比べて笠の軒が薄すぎる印象を受ける。火袋の四面には立連子が刻まれている。なお竿の節が突出しており、「灯-1」と薄い軒や竿の造りなど、特徴が酷似している。	この灯籠も「灯-1」「灯-7」と同様で軒がかなり薄い。全体的に細身にバランスが良いが、宝珠が短く太いため少しバランスを欠いているように思える。蹄踏と職手の一部に破損が見られる。手水-1の蹄踏灯籠として用いられている。	笠や中台、竿、全てが直線的であり、職手がいないことから富士形であると考えられる。火袋がないため、灯籠としての機能を有していない。火袋は昭和39年(1964)に発生した新潟地震の際に失われた可能性が高い。
No.	灯-9	灯-10	灯-11	灯-12
寸法(mm)	H=1950,W=720	H=1800,W=720	H=900,W=840	H=1800,W=390
形式	六角形生込み(光悦形に似る)	春日形	化灯籠	四角形(西ノ屋形に似る)
材質	安山岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩
所見	光悦形に似ているが、笠の形状、火袋の彫刻、竿の節などが少し異なる。しかし全体的には良く似ているため、光悦形を参考にして作られたものだと考えられる。笠は丸みを帯び、重量感がある。樹木や竹が鬱蒼としている奥に、その重量感のある姿が隠見されて面白い。	宝珠の先端が長く伸びる。全体のバランスと比べ宝珠が少し大きい印象を受ける。大きな破損等はない。ほぼ完全な状態である。火口にはガラスがはめられ、火袋内の電球に電気を供給するコードが伸びる。	極度の風化が進んでおり、火袋は消失し存在しない。灯籠としての意味をなしていないが、茶室の奥に位置し、あまり人が通らない場所のため、そのまま放置しても問題ない。	西ノ屋形に非常によく似ているが、竿に緩やかにくびれがある。笠の軒は厚く、垂木等の装飾は見られない。火袋には仏のような彫刻がある。手水-5の鉢形として用いられているが、背が高いため、手水鉢とのバランスが悪い。
No.	灯-13	灯-14	灯-15	灯-16
寸法(mm)	H=1200,W=390	H=1500,W=720	笠,W=640	H=800,W=630
形式	六角形生込み(光悦形に似る)	化灯籠	六角形	六角形寄灯籠
材質	花崗岩	花崗岩	安山岩	花崗岩
所見	光悦形に似た「灯-9」と同じ形である。但し材質や各部の大きさなどは異なる。こちらは手水-6の鉢形と同じで用いられており「光悦形」本来の大きさに近いが、「灯-9」と同様、昭和前期に撮影された古写真にその姿が確認できる。	笠の前面にセリ矢の跡がある。化灯籠としてはバランスのとれたものである。但し、基礎の材質が竿など他の部位と異なるため、その接合部に違和感を感じる。茶室内からこの灯籠を見た際、「灯-13」と重なって見えてしまうため、違和感がある。	昭和39年(1964)の新潟地震で倒壊したのか、各部分の基礎の周辺に散在している。基礎、竿、中台、火袋、笠、宝珠の各部分は存在する。しかし、火袋は大きく割れている。各部分に納められ、火袋を修復すれば利用可能である。	笠が二重になっている造り的な寄灯籠であるが、バランスが悪く美しくない。火袋と一段目の笠は同質で中び色の強い花崗岩である。二段目の笠は、その形状から雪見灯籠の笠であったものを再利用したものと考えられる。待合の脇にあり、存在意味は不明。
No.	灯-17	灯-18	灯-19	灯-20
寸法(mm)	H=2400,W=780	H=2100,W=1200	H=5100,W=1110	H=1050,W=720
形式	春日形	山寺雪見形	船寄形	三脚雪見形
材質	花崗岩	花崗岩	花崗岩	安山岩
所見	中台の格座間には二区に分かれ、十二支紋が彫られている。本庭園に多くある灯籠の特徴である「笠の薄」「軒」と突出した竿の節の二つを備えており、同一人物の作である可能性が高い。「灯-1」「灯-6」と同様、昭和前期に撮影された古写真にその姿が確認できる。	稲田石(花崗岩)を使用している。笠に照りや職手があるため、山寺雪見形といえる。修学院離宮に似たようなものが存在する。しかし、本灯籠は脚が花瓶形で大きく深くである。その姿は大きく、池の中央部に位置し、点景物として目立つ。倉田六治の作である。	彫刻など少々異なる点もあるが、宝珠の形態から般若寺形といえる。火袋には牡丹、獅子、鶴、雲の彫刻、中台の格座間には十二支が彫られている。基礎の格座間にも鳥、兎、雲の彫刻がある。この笠の脚も他と同様薄めである。竿の下部に欠損があり、修復が必要がある。	「灯-9」と石質が同じであり、他に同様のものが見当たらないため、本灯籠が「灯-9」は同じ時期に作られた可能性が高い。小ぶりでバランスが良い。本庭園の中でも秀逸な作品。笠には補修痕がある。
No.	灯-21	層塔-1	層塔-2	手水-1
寸法(mm)	H=1800,W=600	H=4500,W=1000	H=7300,W=1200	H=400,W=1100,D=600,φ400
形式	丸形(魂見形に似る)	十三重石塔灯籠	十三重石塔	自然石(司馬温公形に似る)
材質	花崗岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩
所見	魂見形に似ているが、本灯籠は生込み形ではない。他の灯籠と同様、昭和39年(1964)の新潟地震の影響か、火袋を失っているため、灯籠としての機能を失っている。存在の意味がないため撤去しても問題ない。	石塔と同じような形であるが、塔身に火袋を掘り灯籠とし、尚且つ下部を基礎とせず茨形四脚としている。なお、笠は十三重である。相輪部は昭和39年(1964)の新潟地震で落下し、宝珠は脚元に宝珠以外は四阿の背後で土留めとして利用されている。	層塔-1と同様、昭和39年(1964)の新潟地震によって相輪が落下し、そのまま放置されている。相輪には小さな網が確認できる。大きな傷はない。なお塔身は四方仏である。	自然石の手水鉢である。司馬温公が大きな水瓶に落ちた友達を救うために、高価な水瓶を割り、命を助けたという故事に由来する、司馬温公形に少し似る。
No.	手水-2	手水-3	手水-4	手水-5
寸法(mm)	H=600,W=1200,D=1200	H=750,W=1100,D=800	H=900,φ600,内φ360	H=370,W=600,D=600,φ500
形式	井桁形	自然石	藁形	四角形
材質	花崗岩	花崗岩	花崗岩	花崗岩
所見	全体的に丸みを帯びており、人工的過ぎず良い。この井戸は枯れ流れの中に設けられているが、自噴してはたか定かでない。煎茶趣味的要素の強い空間を演出している。	鞍馬石(花崗岩)を加工した縁先手水鉢である。水道による近代システムを備え、水が湧き出し、オーバーフローした水は下に据えられた赤玉石に落ちる。その水は薄く流れとなり池に注がれる。本庭園の中でもっとも凝った意匠と言え、大変美しい。	表形の縁先手水鉢である。加賀田家所有の昭和57年(1982)に増築棟が建てられた際、取り壊された「湯殿」に付設してつくられたものである。現在は周囲の建物との関係が断ち切られており、使用が困難である。	四面に走り獅子紋が刻まれており、彫りが深く美しい。外露地において縁先手水鉢として機能している。丸みを帯びた台石の上に置かれたアンバランスであるが、その危うさが何と美しい。寛は堀の内側つり内露地に伸びている。
No.	手水-6	手水-7	欄干-1	欄干-2
寸法(mm)	H=650,W=450,φ450	H=300,W=600,D=400,φ200	H=1300,φ330	H=1200,W=270,D=210
形式	四方仏形	自然石	自然石	花崗岩
材質	花崗岩	花崗岩	安山岩	花崗岩
所見	四方仏形の手水鉢で、中鉢形式の蹄踏を構成する。寛が長く、脚を貫き外露地にある「手水-5」まで続く。四方仏の彫りが甘い、直線的な構造で、丸みを帯びた鉢形用の灯籠(「灯-13」)や根上り松とともに幽玄な雰囲気を出している。	前石や湯桶石、手觸りを備えた向鉢蹄踏の形式をとっているが、存在の意味が不明であり、濼に該当する部分が、腰掛待合の雨落ち溝をせき止めて作ってある。	東京都墨田区にあった養義園の「御なりばし」の欄干柱を先立会で購入し運んできたものである。バランスの良いその姿は、本庭園に品格を与えている。	「養義園」の欄干柱と対になるように、もう一方の橋の脇に配されている。しかし、「養義園」のものは四角く端正であるのに対し、こちらのものは丸い。橋のバランスが良くない。昭和初年に撮影された16mmフィルムに写り込んでいる。



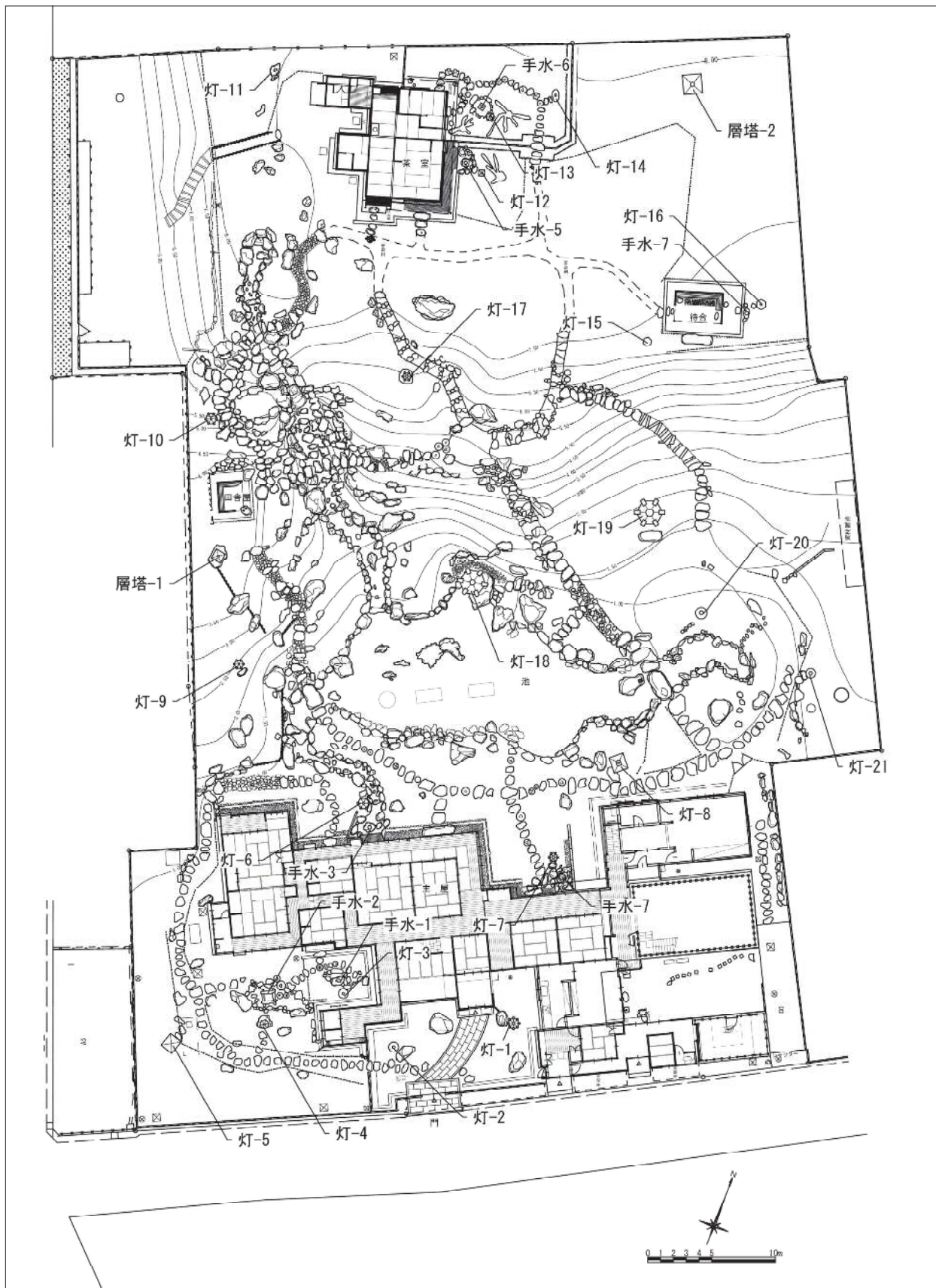


图3-20 石造物の分布图

## 第6節 建造物

### 建造物の概要

旧齋藤家別邸は、大正7年(1918)に、4代齋藤喜十郎が建てた近代和風建築である。第2次大戦後は、進駐軍による接収を経て加賀田組が購入し、住宅として使用していた。その後平成21年(2009)に新潟市が取得している。建築後90年以上を経ており、改修や破損箇所もみられるがおおむね旧状を良く残している。庭園とあわせて大変凝った造りの建造物であり、高い文化財的価値を有するものと思われる。

### 配置

旧齋藤家別邸は、敷地中央に砂丘斜面を活かした主庭を広くとり、南側に主屋を、南東側に土蔵を、敷地北側の高台に茶室を置く。主屋と茶室間の丘陵部に待合、中腹に田舎屋を配する。敷地に南面する道路に門を構えている。

### 主屋

主屋は木造2階建てで入母屋と寄棟造りの棧瓦葺きの棟が東西に長い雁行型に並ぶ。敷地南側の市道に面して門が構えられ、庭を通じて入母屋造りの2階建ての棟に接続する。2階建ての棟の西側には寄棟造り平屋の建物、東側には南北に長い入母屋造り平屋の建物があり、市道に直接面している。東側は切妻の棧瓦葺き2階建ての土蔵1と接続し、南側では土間で道路に面する土蔵2に接続している。土蔵1の北側には昭和57年(1982)に建築された寄棟2階建ての建物が接続している。主要室の特徴を以下に示す。

**座敷(1)、(2)** 座敷(1)は玄関の北側に位置し、西側の座敷(2)と続き間になっている。桁行2間半、梁間2間10畳であり、入側に面する北面には雪見障



図3-21 一階座敷(1)より(2)を臨む

子が入っている。座敷(2)の境の上部には月の字を崩した黒漆塗りの欄間を設けている。四周とも長押があり、下がりの小壁は漆喰壁である。天井は猿頬の竿縁天井である。座敷(2)の西面には北側に付書院と床の間をしつらえ、南側には違い棚と天袋を設けている。

座敷(1)、(2)の北面および東面には入側を設け、内側半間分は畳敷きとし外側は板縁とする。内側には高欄風の手摺を廻し、柱の外側には腰板付きのガラス戸が入る。ガラス戸の溝は一本引きですべての戸を戸袋に納めることができる。座敷の北面、東面を開け放しにして外部空間と一体化することが可能で、座敷からの庭の眺望を楽しむことができる。

**座敷(3)、(4)** 座敷(3)は4畳半であり、東面には赤松の面皮柱を設けるなど数寄屋風としている。婦人の書斎と呼ばれていた。座敷(4)は仏間といわれ、上げ下げ襖で仏壇を置ける棚と上部に神棚のある床の間をしつらえている。天井は杉の格天井で、南側には水屋が設けられている。

**座敷(5)、(6)** 座敷(5)は主屋の西側に位置し、桁行2間、梁間2間半の8畳である。西面には蹴込み床と吊り棚がある。南面は高欄付きの縁廊下を持つ。座敷(6)は11畳半であり、北東側には地袋付きの棚と平書院が設けられている。北面は高欄付きの縁廊下であり、書院との境はにじり口風の襖で仕切っている。座敷間の上部には竹の模様の欄間が設けられている(座敷(6)の北庭には竹が植えてある)。

**座敷(7)、(8)** 両座敷とも座敷(1)と土蔵1を結ぶ廊下に面している。座敷(7)はかつて「茶の間」と呼ばれ、両座敷とも私生活ゾーンであったことが窺える。座敷(8)は内装が桧仕上げ風につき板を杉の柱に貼って昭和57年(1982)頃に改装されている。このような改造は脇玄関、居間、台所、4畳半、3畳間にもみられる。

**二階座敷(1)、(2)** 2階の座敷(1)、(2)は1階の座敷(1)、(2)の真上にあたる。座敷(1)は広さ10畳で、南面には残月床と付け書院、違い棚がしつらえてある。座敷(2)は10畳の広さで、座敷の間には菊など花を題材にした透かし彫りの欄間がある。座敷の北面および東面には入側があり、内側半間分は畳敷きとし外側は板縁としている。内側には高欄風の手摺を廻し、柱の外側には腰板付きのガラス戸が入る。座敷側は雪見障子となっており、1階の座敷と同様のしつらえとなっている。1階と同様に、ガラ



図3-22 二階座敷（2）より（1）を臨む

ス戸の溝は一本引きですべての戸を戸袋に納めることができる。座敷の北面、東面を開け放しにして外部空間と一体化することが可能で、座敷からの庭の眺望がすばらしい（1階からは見上げ、2階からは見下ろしの庭への視線となる）。

**二階座敷（3）** 座敷（3）は座敷（2）の西側に4畳間を挟んで位置する4畳半の座敷である。入口はにじり口風の襖になっており、内部のしつらえも南側が葦天井、北側が杉板空のつき板天井となっており、窓の開け方なども茶室風にしつらえている。

### 土蔵

**土蔵（1）** 主屋の東側、東側増築棟の南側に位置し、座敷（8）の北側の廊下と接続している。桁行5間、梁間3間の切妻棧瓦葺きの2階建てである。柱、床板には桧を使用し、大梁はケヤキ、小梁はマツを使用している。外壁はかつての庭に面する部分はナマコ壁で、その他の部分は杉板貼り仕上げとなっている。腰上部は白漆喰仕上げで蛇腹部分と窓には黒漆喰を使用している。

**土蔵（2）** 土蔵（1）の南側に位置し、市道に直接面している。市道側と東側はナマコ壁、北側は杉板貼りである。桁行3間、梁間2間の平屋建てである。柱はマツ材で床は凝灰岩が敷いてある。

### 増築棟

ヒアリングにより昭和57年（1982）に建設された2階建ての建物で、加賀田家の紋の瓦が葺かれている。工法は現代の工法が使われており、洋式の住まい方の寝室などに利用されていた。

### 茶室

茶室は敷地北側の高台の丘陵部に位置し、桁行3



図3-23 茶室南東面

間、梁間2間半の入母屋造りに、桁行2間、梁間3間の入母屋造りが直交した主体部に西側の便所と玄関部分が接続した建物である。柱には杉の面皮柱が使われている。

南西部に水屋入り口があり、あがり縁に続いて畳廊下となる。畳廊下の南東には座敷8畳がある。座敷の北面に床とその西側に上床がある。南面と東面には障子戸が入り、その外側は竹でしつらえた縁が廻っている。天井は桐板で竿縁天井となっている。縁の外部天井は網代天井となっている。

茶室北側には4畳の茶室があり、北面ににじり口がある。部屋の西側に床があり、南には点前畳があり、赤松の皮柱がしつらえてある。点前は蒲天井、東側は網代天井、西側1間は屋久杉板空の竿縁天井となっている。

畳廊下の北側には水屋が設けられている。

### 田舎屋

主庭の西側の中腹に位置する田舎屋は桁行1間半梁間1間で、入母屋の茅葺である（現状は茅の上に杉皮を葺いている）。外壁は北面と南面の腰部に網代をまわし、西面は杉皮貼りとなっている。上部は土壁である。内部天井は葦天井で、軒裏は杉皮となっている。床は石敷きとし、西面と北面に腰掛が設けられている。

### 待合

待合は茶室南東側の丘陵上部に位置し、桁行2間、梁間1間の寄棟銅板葺である。外壁は腰部に杉皮をめぐらし、上部は土壁とする。天井及び軒裏は杉皮網代天井である。内部の北面、東面には腰掛を設けている。見晴しの南面、西面は開け放されている。床は豆砂利の洗い出し仕上げで、腰掛前には石が敷かれている。東側は板戸で仕切られており、雪隠が設けてある。



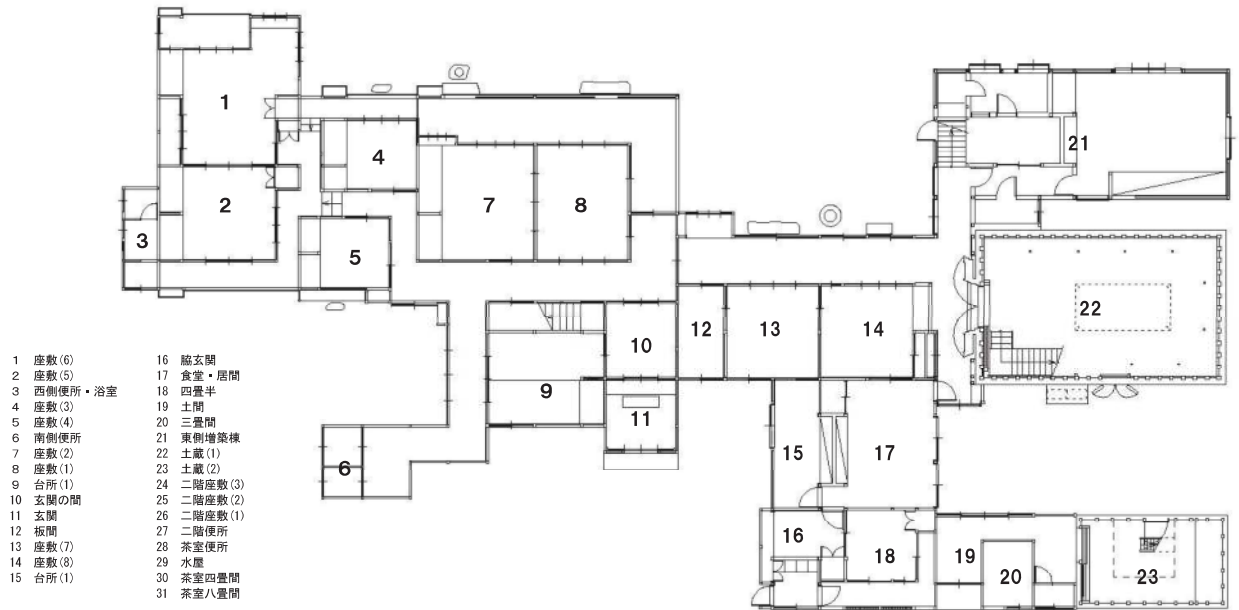


図3-24 部屋名称図(主屋1階平面図)

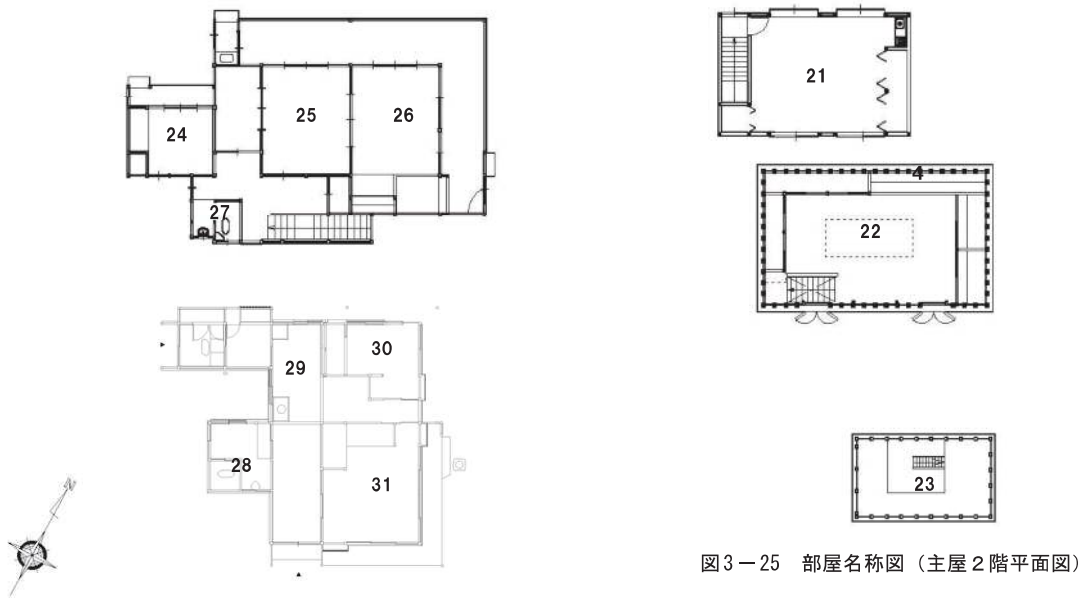


図3-25 部屋名称図(主屋2階平面図)

図3-26 部屋名称図(茶室平面図)

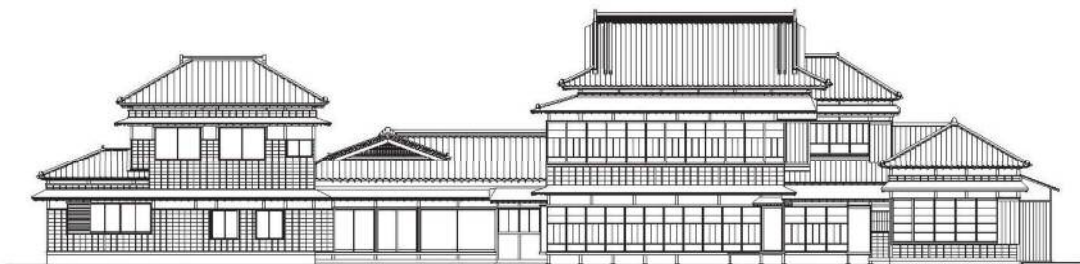


図3-27 主屋北側立面図